

「三つの神話に関するノート」

—— 「日本語の難しさ」「日本人の外国語下手」「日本語の非論理性をめぐって」 ——

望 月 善 次

《 ま え が き 》

「外国語の教師をしていると、言語の学習がいかにたいへんなものであるかが身にしみてわかる十年やっても、二十年やっても、外国語が『できる』という実感が、わからない。

それなのに、生れて20ヶ月もすると母国語が話せるようになる。(中略)それにしても、物心のついていない赤ん坊が、とくに言語教育の知識や経験のあるわけでもない母親を先生にして、無から有を生ずるような言語の学習をして、二年たらずで第一段階を完了させるとは、まことにもって驚異的である。」① というのは、英文学者の外山滋比古氏の言である。しかし、この外山氏の言をまつまでもなく、あらゆる人間が、民族、言語の相違を越えて、特別な障害でもない限り、生後ある一定期間を経ると、一応言語をあやつることが可能になり、自分達の表現しようとすることを相当の程度にまで表現できる様になることは、広く認められるところである。そしてこの言語をあやつる力が、人間の最も根源的なものであることは、ヘレン・ケラーの「自伝」② や「アヴェロンの野生児」③ の一節が感動的に伝えるところでもある。

勿論、この言語をあやつる力の内側に入ってみると、事情はそれ程簡単ではなく、今日でも謎とされているところは多いのである。例えば、最近の言語学の主流たるチョムスキーなどの変形生成文法が、その柱の一つとして、この全ての人間に共通するものとしての「言語能力」を立てている事実などは、この分野での研究が、これから更に深められねばならぬことを物語っていると思うのである。

しかし、繰り返す様であるが、上述の多くの不明の部分を残すというそのレベルは、決して、あらゆる人間に言語をあやつる力のあることを否定するというレベルにおいてではなく、あくまで、全ての人間に共通する言語の力を認めたその次の段階においての問題なのである。

とすると、三つのテーマ「日本語の難しさ」「日本人の外国語下手」「日本語の非論理性」に関する結論も、案外平凡なところにあるということになる。

まず、「日本語の難しさ」についてであるが、言語をあやつる力は、人種、言語の相違を越えてあらゆる人間に共通する事実であるから、ある言語が難しく、ある言語が易しいなどということは、原理的に存在しない。従って、勿論言語のうちの一つたる「日本語」が特に難しい言語であるということとはあり得ないことになる。

次に「日本人の外国語下手」であるが、上の「日本語の難しさ」で述べた如く、あらゆる言語間に、原理的難易の区別はないのであるから、その裏返しとして、当然、外国語上手の国民、外国語

下手の国民などというものは存在しようはずがないのである。

最後に「日本語の非論理性」についてであるが、これも既に述べた如く、どの言語を用いる人も（言語それ自体のもつ限界の上に立ってでのことではあるが）一応は、自分の表現しようと思うことを過不足なく表現することが可能なのであるから、ある言語が論理的であるとか、論理的でないとかいう議論は余り意味のないことになる。

以上述べた如く、三つのテーマは、いずれも原理的には存立不能である。それにも拘らず、これら三つのテーマに対する肯定的雰囲気は、日本国民の中に瀰漫している。敢えて「神話」と呼ぶ所以でもある。

それでは、何故かかる「神話」は発生するのか。その発生の背景を以下順を追って整理して行こうというのが、本ノート作成の狙いである。

註

- ① 外山滋比古『女性の論理』 P 44～45
（中央公論社 s 49-4）
- ② H. Keller, 'The Story of my Life' Chapter IV
渋谷夏雄訳『いのちの夜明け 前編』 p 42～47
（学習館 s 30-5）
- ③ イタール『アヴェロンの野生児』 IV章
古武弥正訳（福村出版 , 75-6）

I 三つの神話に共通する背景

「まえがき」でも述べた如く、三つの神話は、相互に深い関連をもっている。従って、それぞれの神話のもつ背景は、他の神話の上にも色濃き影を落しているのであるが、この章では特に三つの神話に共通する背景として「日本人（日本語）は特別な民族（言語）である。」とする考えと「言語系統無視」の二つの問題のみをとりあげ、これ以外の背景については、それぞれのテーマに、より深い関連をもっていると思われる箇所でもとりあげたいと思う。

1. 日本人（日本語）は特別な民族（言語）である。

三つの神話に共通する背景の第一に取り上げるべきものは、「日本人（日本語）は特別な民族（言語）である。」とする考え方である。この考えは、あらゆる人間のもつ「自分ないしは自分達を中心とする考え方」の日本的あらわれとして位置づけることができる。この自己中心的思考は、人間の精神的本能のようなもので（もともと、歴史が下り人間理解の地平線が広がる程、この本能はある面ではその強さを薄める傾向もあるが）かつて私はこの精神的働きを「精神的天動説」と呼んだ。①一方から言えば、この「精神的天動説」観は、他の本能と同じく、人間が生きて行く上で、

是非共必要なものの一つで、必らずしも、非難ばかりをあびせるべき性質のものではないが、この面のみが強調されると、おかしなことになるのは、これ又、他の本能の場合と同じである。国家や民族の上にこの行き過ぎのあらわれた例としての、ギリシャの「バルバロイ」や、中国の「東夷・西戎・南蛮・北狄」の例は、余りにも有名である。

上述の「日本人(日本語)は特別な民族(言語)である。」とする考え方も、この「精神的天動説」の延長線上にあるという点では、極めてありふれたものであるが、以下述べる様な2つの理由により、この性質が増幅され、日本独特な性質をもつに至ったのだと考えるべきであろう。

つまり、第一には、日本の地理的状況である。すなわち、日本海によってアジア大陸と隔絶され島国となることにより、自己を中心とする条件が更に強まったのである。又この地理的位置は、世界の四大文明との地理的距離という視点からみても、四大文明中最も近接する中国文明から、丁度東の端に位置におかれていて、上記条件は更に増幅されたのである。

又、第二には、少なくとも現在の我々の知る限りでは、日本は、文明的に常に輸入国であったから、「自分達は、特別な民族である。」という精神的天動説を裏返す形で、自分達のことを常にマイナス時、否定的に考える傾向が強かったということである。もっとも、我々の先人達が、自分達のことを、常にマイナス的否定的に考える傾向が強かったことを、我々の文化の弱点としてのみ考えることは、人間の精神活動を十分考慮に入れぬ片手落ちの見方というべきであろう。このことは個人において、自己の弱点への自覚が、いかなる働きをもたらすかを考えれば、ただちに了解できることである。我々の先人達にも又、マイナスへの自覚を飛躍点にして自分達の文化を推し進めて来たところが、確かにあったのである。それはさておき、「自分達は特別な民族である。」という人類一般に普遍的に見られる命題は、我国においても歴史をくぐり抜けることによって、日本的性質を帯びることになったのである。すなわち、このノートのテーマである言語の問題に収斂して言えば、「日本人は、自分達の言語を他の国の言語とは異なる特別な言語だと考え、しかもその言語は他国の言語よりもマイナス面を多くもった言語ではないか。②」と考える傾向があったということである。

2. 言語系統の無視

ある言語と他の言語との比較を行なう際、問題を空転させる要素の一つとして、言語系統を無視して話を進めるといことが存在する。ノートでとりあげている三つの神話発生の背景も、この点に原因することも多い。従ってこの言語系統の無視の問題について以下略述したい。

既に繰り返し述べている様に、言語というものは、原理的にみれば、どの言語も同質のものを根底においている。が、各言語の音韻、形態、文法等は、それぞれの言語によって様々に異なっている。ところで、今、漫然と各「言語」という言葉を用いたが、一つ一つの言語を決定することは、それ程容易なことではない。つまり、ある言語の方言化がどの程度まで進むと別の言語と見なし得るかということは、極めて微妙な問題で、現在のところ学問的レベルでの定説はなく、多くその区分を、政治的区分によっているのが実態である。③ 従って、世界の言語の数の決定も、そう単純

な問題ではないのである。それでも、今日、おおよそ、3,000とか3,500とか言われる世界の言語は比較言語学等の成果により、その系統がある程度は解明されている。このうち日本語についての研究は、多くの研究者の努力にも拘らず未だ不十分で多くの疑問的を残している。現在の共通理解は、やはり服部四郎氏の次の言などにおくべきであろう。

「…現在までの諸学者の研究結果では、日本語と他の諸言語との親族関係は、琉球語ととのそれを除いては、証明されていないといわなければならない。(中略)しかし、日本語と同系である蓋然性の最も大きいのは、朝鮮語・アルタイ諸言語であるといってよいと思う。」④

ところで、我々日本人が、日本語以外の言語を考える時、頭に描く外国語のイメージとはどういふものであろうか。実際に各人が描く像をつきとめるのは困難ではあるが、その公約数的なものとして現在(昭和51年4月)NHKで行なっている外国語番組の外国語をとりあげて見ることはそれ程見当外れのことではないと思われる。その実際は、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、ドイツ語の6カ国語である。つまり、我々日本人の多くは、日本語以外の言語を考える時、具体的には、上にあげた6つの言語を中心にして、そのイメージを組み立て易い傾向があるとも言えるのである。

とすると、その外国語を考える際に、ここで述べている言語系統の問題を是非考慮に入れねばならないであろう。何故ならば、改めて述べるまでもなく、上述の6つの言語は、日本語とは言語系統を著しく異にするからである。つまり、上記6カ国語のうち、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語の5つは、いづれもインド=ヨーロッパ語族に属し、(これらは更に英語とドイツ語はゲルマン語派、フランス語、スペイン語はロマンス語派、ロシア語はバルト・スラヴ語派へと分類可能である。)中国語はシナ・チベット語族に属する。

従って、これらの言語と日本語とは、当然互いに音韻、形態、文法等を大いに異にするはずで、これらのことを無視して、日本語、中国語、各印欧語などを同一線上に並べて、その優劣を争うことなど、大よそナンセンスである。がこのナンセンスの肯定がなければ、上記三つの神話は、その発生の重要な契機を失うであろうことは、以下の章においても述べるところでもある。

註

- I ① 「日刊 えどがわ」(東京都立江戸川高校定時制課程校内紙) 652号、654号
s48.6.22, 6.25
- ② この結論の中でも、「日本人」という人種的概念と、「日本語」という言語的概念と、「日本国」という国家的概念という三つの異なったレベルの概念が、互いに矛盾しない一体のものたるかの如き叙述を行なっている。このことは、後に述べる鈴木孝夫氏の言の如く日本語の「属人主義」と深く関わっている。しかし、本ノートでの叙述は、そのことに深入りせず、一応「属人主義」を前提として行なうこととする。
- ③ 田中春美他『言語学入門』 p200など
(大修館 s50-3)

II 第一の神話に関するノート——「日本語の難しさ」をめぐって

「日本語の難しさ」という面には、二つの面がある。一つは、日本人自身が「自分達の言語は難しいのではないか。」と感じる点であるし、もう一つは、外国人が、これを修得する際に感ずる困難さである。ここでは、今までの論の流れからも重点を、前者の「何故、日本人は自分達の母国語を難しいのではないかと考えるか。」に置き、後者については、主として「日本人の外国語下手」の中で簡単にふれるにとどめたいと思う。

ところで、去る4月3日(土)のNHK・TV番組「日本語教室」①の副題は「ニホンゴ ムズカシイデス」であった。既に繰り返して述べている如く、あらゆる言語の中に、原理的に難しい言語とか、そうでない言語とかは、存在しないから、正面切って言ってしまえば、この番組の表題は、まことに的外れのものであるといえよう。しかし、国民の平均的感觉を代表すると自称するNHKが、かかる表題の放送を行ない、視聴者から大した抗議も受けていないらしいということは、逆に「日本語の難しさ」についての神話が、いかに広く受け入れられているかという事実を示していると思われる。

それでは、何故日本人は「自分達の言語は難しい。」と考えるのだろうか。「まえがき」で既に述べた2つの理由につけ加えるべきものとして、「日本人の精神的所産としての日本語の難しさ」と「漢字の難しさ信仰」との2つをあげたいと思う。

1. 日本人の精神的所産としての日本語の難しさ

この辺りの事情を最も良く説明しているのは、鈴木孝夫氏の次の様な言である。

「……外国人には、日本語が分るはずはないという確信である。この確信は、日本人の日本語観が、日本という国家と固く結びつき、日本文化と一体化している属人主義的性格が強いということに支えられているのである。」②

つまり、鈴木氏は、日本人のもつ日本語の難しさに対する感情は、言語構造そのものよりも、日本人自身の歴史の生み出した所産なのであり、その根拠として、日本語の「属人主義」的性格をあげているのである。この日本人の自分の言語にもつ幻想については、外国人からも多くの発言のあるところである。ここではその1例として、ドナニコ・ラガナ氏の「日本語は怪物みたいな言語ではない。」③を挙げておきたいと思う。

2. 漢字の難しさ信仰

日本人の幻想が生み出したもう一つのものとして「漢字の難しさに対する信仰」の問題をとりあげたいと思う。

この漢字の問題は、日本語表記法の一部として考えられるべきものであろう。ちなみに現代我国で日常的に使われている文字は、漢字・平仮名・片仮名・ローマ字・アラビア数字の5種類である。この5つの文字の使用は、世界でもその数の多さという点で注目すべきことは、すでに金田一春彦氏などの指摘するところである。④ 又、この5つの文字による表記法を一言でいえば「漢字仮名混り文」ということになると思うが、この方法が、大勢としては日本語の性質にかなったものたることはこれ又多くの言のあるところである。⑤ ところで、この漢字仮名混り文の中で、最大の論議を呼んでいるものは、漢字であり、それを支えているものは、「漢字は難しいものだ」という多くの人々の確信である。しかし、漢字が、果して世間一般に考えられている程に難しく、不便なものであるかについては、再検討の余地があると思われる。このことについては、つとに石井勲氏などによる実践⑥があるし、又、日常レベルにおいてもカナばかりの文章が案外読みにくいものであることは電報などを読む際に実感できることである⑦が、私自身もそのささやかな体験を⑧記したいと思う。

私がある定時制高校で教えていた生徒の中に、入学時55才であったKさんがいた。Kさんは家庭の事情で、小学校も満足に行けず、中学卒の資格は、都内のある「夜間中学」へ通うことによって得たのであった。Kさんの入学時の読み書きについての学力は、クラスでも最も低いものであり、1年生の時は、そのこともあり留年する程であった。その後本人の努力により、漢字の読み書きについては一般生徒を上廻るところまで行ったが、仮名の方は、所謂「特殊表記」を中心として本人の非常なる努力にも拘らず、どうしても十分に使いこなすことができなかつた。

勿論、この極めて貧しい例から、速断する積りなどないが、多くの先人達の実践と相まって、「漢字の難しさ信仰」に対する一つの資料提出にはなり得ると考えている。（「漢字の困難さ信仰」は現行の指導法によっても支えられている。漢字は、その性質をふまえて構造的、系統的に学習されるならば習得の困難さは大幅に改善できるのだということをここで詳しく触れ得ぬが、筆者も、自分自身の実践からも言い得ると思う。）

註

- II ① 放映時間；第1チャンネルの午後10：00～10：30（東京地方）
② 鈴木孝夫 『閉ざされた言語 日本語の世界』 P176～177
（新潮社 S50-3）
③ 「日本語を考える」 一対談 小川国夫VSドメニコ・ラガナ
＜『総合教育技術』小学館 S50-5月号 P84～85＞
④ 金田一春彦 『日本語』 P222
（岩波新書 S32-1）
⑤ 東京大学公開講座『言語』 P228
（東京大学出版会 '67-8）
⑥ 石井勲「漢字は難しくない」

(『文芸春秋』 S36-12月号)

<西尾実 久松潜一監修「国語国字教育資料総覧」 P609~615>

- ⑦ 電報の場合等を提出するに当っては、当然、最低次の二つのことを考えるべきであろう。一つは「分ち書き」の問題であり、もう一つは、「『読み』及び『書き』についての漢字の困難さの比較検討」の問題である。しかし、ここでは、本、ノート の性質上、これ等の問題についての詳論は略し、一応トータルな問題として漢字の難しさの問題を扱うものとする。
- ⑧ 於；東京都立江戸川高校校定時制課程

Ⅲ 第二の神話に関するノート — 「日本人の外国語下手」をめぐって

日本人の外国語下手については、既に伝説化している感さもある。① しかし、本来各々の言語間に難易の区別は存在しないのだから、従って一般的に、外国語上手な国民、もしくは、外国語下手な国民など存在しようがないのだということは、既に「まえがき」で述べたところである。つまり、「日本人の外国語下手」という幻想は、ちょうど第二章の「日本語の難しさ」を裏返した形での幻想なのである。

原則的に言えば、おおよそ「外国語」というものは、どこの国の人々にとってもやさしいものではないのである。例えば、言語系統を同じくする英語とフランス語との間にも次の様な例が存するのである。すなわち、G、オーウエルはその著「イギリスの人々」の中で、イギリスの非上流階級が外国語(この場合はフランス語)が苦手なばかりに、所謂「外人部隊」の中で、どんなに出世できないかを描き出している。②

従って、もし言語系統の無視ということさえなければ、日本人が特別に外国語下手であるという結論は出て来ないはずである。例えば、日本人の英語下手についていうならば、日本語を母国語とする者が英語を修得する場合と、英語を母国語とする者が日本語を修得する場合とを比較せねばなるまい。言語系統を無視して、仮に英語と同じ言語系統に属する、ドイツ語やフランス語を母国語とする者が英語を修得する場合と、日本語母国語者が英語を修得する場合とを比べるならば、両者に差のあるのは当然である。もっとも「外国語教育」ということから考えると、抵抗の少ない同系統の外国語をやるのがよいとは必ずしも言えない。我々日本人は、自分達の言語とは大いに異なる系統の外国語(英語)を学習している現状の意義をもっと認めるべきであり、そういう意味での外国語下手をもっと誇ってよいはずである。

さて、話がやゝ横道に逸れたが、以上の如く、原理的には「日本人の外国語下手」ということは存在しない、しかし、日本人の外国語修得の中に以下述べる様な2つの、一見「外国語下手」を思わせる特色のあることも又事実である。「日本人の外国語下手」についての神話は、上述してきた点に加えてこういうことを背景にして生まれたのだと考えられる。

1. 西欧語修得の情熱の衰退

外国語学習を支えるものゝ最大の条件は、何といっても「情熱」である。この「情熱」を個人のレベルを越えて巨視的に見ると次の様にいえる。つまり、言語は、文化と深く結びついているから、すぐれていると感ずる文化に接すると、その文化を担っている言語を修得せんとする傾向の生ずるものなのである。このある社会ともう一つの社会とのあり方を「外国語学習」の視点から分析してみせたのは、外山滋比古氏であった。③

「外国語はどういう社会で始められるかという問題をまず考えておく必要がある。当該外国語を国語とする国と自国との関係は

- (A) 相手国が先進国的優位にあって、自国を凌駕している場合
- (B) 相手国と自国とが対等の場合
- (C) 相手国が自国よりも低い場合

の三つしかない。

そして更に氏は外国語が、学校教育の中で制度化されるのは、このうち(A)に限られているとし、且つ西欧社会と我国との現況は、ちょうど(A)から(B)へ移行しているところにあるのだとしている。従って氏は、西欧語修得についての情熱が、日本社会全体としては、例えば明治維新時や第二次大戦直後と比較した場合、低下し、その学習目的にも質的転換が起こるのは、止むを得ないことだとするのである。④ この外山氏の指適は夏目漱石の有名な、語学力低下を「日本の教育が正常な順序で発達した結果」⑤であるとする言とも一致するのである。つまり西欧語に関する限りは、社会全体としての我国の外国語修得の情熱は、一時より低下し、従って西欧諸国語をあやつる力は、衰えていると言ってよいであろう。しかし、この西欧諸国語への力の衰えを、直ちに外国語一般に及ぼしてはならぬことは、当然のことである。が、又一方から言えば、我々日本人が外国語を思い浮かべる際を中心となってきたこれらの言語への情熱の衰えや力の後退が、「日本人の外国語下手」を肯定する雰囲気をもつこと、十分な根柢をもつところである。

2. 日本人の話し下手

日本人の外国語は、決して下手ではない。これは、今まで述べて来た言語の本質から考えても当然のことであるけれども、実際の多くの例もあるところである。つまり言語系統の相異から来るギャップの余りないある言語を数カ国の人々と一諸に学習する際、一般的に言えば日本人の外国語修得は、決して不出来ではないということである。不出来ではないどころか、一般的傾向としては、ペーパーテストや文法などでは、抜群の成績を示すそうである。ところが実際に「話す」ということになる、ペーパーテストや文法などで優秀な割には、どうも、一歩遅れをとり易いということである。⑤ つまり、「日本人の外国語下手」というのは、多くはこの「話し下手」なのである。それでは、日本人の話し下手という現象はいかにして発生したか。以下2つの点から略述したい。

イ．外国人恐怖症

「日本人の話し下手」の背景にあるものの一つは「外国人恐怖症」である。「話す」という行為は言語行動の中では、最も、直接的な行為であり、その意味では、最も「全人格的」行為である。従って当の話す相手に対して、どういふ感情を抱いているかが、最も敏感にはね返るのが、この行動の特色である。日本人が、自国の文化をマイナス的に考える傾向のあることは、既に「まえがき」で述べたところであるが、これに鈴木氏の次の様な分析をつけ加えれば、外国人恐怖症及びそのもたらす「日本人の話し下手」についての背景は、ほぼ明らかになったとみてよいであろう。

「第一に、日本人の大多数は、未だ外人恐怖症(Xenophobia)から抜け切っていないということである。(中略)第一の問に対する答は、簡単明瞭である。我国は、外国とは、国境を接することが全くない完全な島国であるのみならず、(例えば、フランス本国は六つの国境で外国に直接つながっている。)また、国内に異民族の大集団がないためである。その上文化の間接受容のところでは述べたように歴史的にも外国人の直接的侵入を受けたことがない。」⑦

ロ．「話す」に余り価値をおかさぬ日本人的思考

日本人が「話す」を不得意とするのは、何も「外国語」の場合だけではない。日本人は、多くの場合、「母国語」においても、話すのを余り得意としないし、又、話すことにそれ程の価値をおかぬのである。⑧ 例えば、谷崎潤一郎氏は、その著「文章読本」の中で

「上に述べたような日本人の国民性を考えますとわれわれの国語がおしゃべりに適しないようにと発達したのも偶然ではない。」⑨

と述べているし、論語の「巧言令色鮮し仁」⑩の言も、我々の先人の愛誦したところであった。この様な「話す」ことへのマイナス的評価の影響が、外国語学習の上にもあらわれるであろうことは、再言を要しまいと思う。

ところで、この「話す」ことへのマイナス的態度は、元来これは、「話す」こと全般へ及んでいたのではなく、「公的な場での話す」に限定されていたのではないかと、現在の私は考えている。次章で詳しく触れるところでもあるが、日本語が「場」に依存することが顕著である性質を有していたことや、上記鈴木氏の言の如く、日本の社会が単一性の強い社会であったことなどを考えてみても、日本人が個人的な場における「話す」に価値をおかなかつたなどは、私には考えられぬのである。「話す」ことへの軽視は、儒教などの影響をうけて、まず男性の支配する公的な場において起り、次第に「私的な場」へも及んで行ったのではないかというのが現在の私の仮説である。

註

Ⅲ ① 先頃英語教育界を席捲した平泉・渡部論争なども、日本人の外国語下手についての確信がなければどうしても理解できぬ現象の一つであろう。

c f 平泉渉・渡部昇一『英語教育大論争』(文芸春秋社 S 5 0 - 1 1)

② G. オーウエル 『イギリスの人々』

< 74 NHK大学講座 「英語2」 P96 >

- ③ 学校教育の例ではないが、この指摘は、先にあげたNHKの外国語番組にあらわれる外国語とも興味深い一致を示している。つまり我々の先人達は、西欧諸国や中国の文化を自分達の国の文化よりもすぐれたものとして考えて来た(傍点筆者)のである。
- ④ 外山滋比古「外国語を考える」 P6~17
(エレック出版 '72-12)
- ⑤ 夏目漱石「語学力養成について」 (「学生」M44 1月号, 2月号)
<岩波版全集②① P555~526 S4-8 >
- ⑥ この種の話は、語学関係の人からよく聞くところであるが、私の、はっきりと意識して聞いた最新の例としては、国立教育研究所の天野正治氏からのものがある。氏の西独イザローンのゲーテ・インスティテュートにおける体験が、余りにもこの例によく一致しているのを興味深く聞いた。(於 東京教育大学大学院講義 「比較教育」 -S51.4.19(月))
- ⑦ 鈴木孝夫 前掲書 P174~176
- ⑧ 例えば西洋教育を代表するペスタロッチの次のような話し言葉尊重の言を我々には何の抵抗もなく受け入れ得るであろうか。「ゲルトールはこうして非常に早くから子供達の手仕事の熟練を促進することにはつとめたが、読み、書きの学習についてはけっしてあわてなかつた。たゞ話し方については早くから熱心に教えた。なぜなら、彼女が言うように『話すことができないのに、読むことや書くことができ何になりましょう。だつて、読み、書きは、たゞ話すことを人工的にしただけのことですもの』と考えたからであつた。」
(アンダー・ライン筆者)
ペスタロッチ「リーन्हルトとゲルトール」 1781~85
<村井実編 『原典による教育学の歩み』 P273 S49-10 講談社>
- ⑨ 谷崎潤一郎 『文章読本』 (中央公論社 S9-11)
<中央公論社版全集 ②① P120 S43-7 >
- ⑩ 学而第一章三節;訓みは 『吉川幸次郎全集④』 P22
(筑摩書房 S48-12)による

Ⅳ 第三の神話に関するノート ― 「日本語の非論理性」をめぐって

「日本語は論理的じゃあないとか、日本語は論理学に耐えないんじゃないとか、そういう発想や問題意識が、やはり明治以降とあると思うんです。たとえば日本語に関係代名詞がない、だから、翻訳する場合に非常に骨が折れるとか、あるいは、日本人は主語を省略するとか、そういうことがある。」①

とり上げたのは「対談 日本語を考える」における大野晋氏の発言である。この大野氏の言は、哲学者大森荘蔵氏との対話中なされたものであり、大森氏の専門の分野からの発想を引き出そうとしてなされた発言でもあるから、かなり割引して考えねばならぬが、それでも大野氏にしてこの言のあるところから考えると、「日本語の非論理性」という神話は、既に述べた二つの「日本語の難しさ」「日本人の外国語下手」よりもかなり深い根をもっているように思われる。

さて、あらゆる言語は（言語の限界の中ではあるが）一応自分達の表現しようとするところを過不足なく表現可能であり、従ってある言語の論理性・非論理性の論議は余り意味のないものではないことは、既に「まえがき」で述べたところである。だとすると、これ以上の言の必要でないところでもあるが上述の如きこの「日本語の非論理」についての、神話の根の深さに鑑み更に二人の言をつけ加えておこう。

その一人は、金田一春彦氏である。氏はその著「日本語」の中で次の様に述べている。

「われわれが中学へ入り、英語を習って驚いたことは、家畜の言い分けの細かさだった。われわれが『牛』と一口に言い、せいぜいオウシ・メウシ・オヤウシ・コウシと分けていることを雌牛は cow、雄牛は去勢したものを ox、去勢しないものを bull と言いわけ、そして子牛を calf と言う。というように全然ちがったことばで言い分ける。「牛」ばかりではない。ヤギもヒツジもそういう言い分けがありと知って英語というものは、何と精密なものだと目をまるくしたものだ。

しかし、これは、その後思いつてみると、英語ばかりを感心する必要はないようだ。日本語では家畜の名前は無造作ではあるが、魚の名前になるとむやみにくわしい。ニシンの卵はカズノコといい、シャケの卵はスジコ、イクラという。ボラという魚は、一番小さいときはスパンリといい、大きくなるにつれて、イナ、ボラ、と名を変え、最後にトドとなる。

とすると、日本語もまたなかなか精密である。」②

つまり、金田一氏は、言語というものは、それを使用している人々の関心のあるところでは、その分化を速め、そうでないところでは、その分化速度を緩めるのであり、あらゆる方面に精密化している方語などというものは、存在しないということを「語彙」のレベルで証明してみせたのである。この事情は、当面の課題である「論理」の問題についても正に同様であって、どの言語が論理的であり、どの言語が非論理的であるなどということはありません。このことの一応の結論として、先の大野氏に対する大森氏の次の様な言を掲げる所以でもある。

「ですから、およそ、わたくしは、日本語の場合だけでなしに、ある言語が非論理的だということ、土台ありえないんじゃないかという感じがします。」③

さて、こう考えて来ると「日本語の非論理性」という神話は、全く発生の余地がないのであろうか。どうも、事情は、それ程簡単ではないようである。他の二つの神話同様、この「日本語の非論理性」という錯覚を生む十分なる背景があるのである。以下、その点について順を追って略述したい。

1. 文明の本質に関する誤解

「日本語の非論理性」という神話を生む背景を巨視的にとらえるならば、そこに浮かび上って来るのは、文明の発展状況に関する誤解の問題である。つまり、文明というものにも、栄枯盛衰は、つきものであるという事実への洞察不足である。例えば、歴史学者A. トインビーはその著「歴史の研究」において23の文明をあげている。④ すなわち現在に至るまでの人間の歴史は、これらの文明が相互に入れかわることによって成立して来たということになる。従って、ある2つの文明を比較し、本質的に一方の文明が他の文明より優れているとか、劣っているとかいふ議論は余り意味のないことになる。この事実を忘れるとある時点で一見優力に見える文明が、本質的に他の文明に優っているのだという誤解が生じる。この誤解は更にその文明を担っている人間や言語への本質的優劣論を生む。

「日本語の非論理性」云々という背後にある一つの考えは、こうしたものである。例えば志賀直哉による「国語としてのフランス語採用論」⑤なども、この文明と言語とに関する誤解を考えねば、第二次大戦直後という多くの日本人にとって試煉の時代ということを考慮に入れても、どうしても理解に苦しむ事実である。

2. 心理的社会的背景

イ. 「島国言語」としての日本語

「日本語の論理性」云々の心理的社会的背景を問題とする時、第一に考えねばならぬのは、「島国言語としての日本語」の問題であらう。この「島国言語」というのは、外山滋比古氏による命名であるが、氏の言わんとするところを要訳してみると次の様になるであらう。⑥

「言語には冗語性というものがある。これは言葉の中に含まれる必要な蛇足であり、どんな言語でも、家族のような互をよく知り合っている間では冗語性が低く、見知らぬ他人同士の間では冗語性が高くなる。前者を『島国言語』後者を『大陸言語』と名づける。

どんな言語でも、その内部には『島国言語的側面』と『大陸言語的側面』とを共に含むのであるがそのどちらをベースにしているかということにより、ある言語を一応『島国言語』と『大陸言語』とに分けることは可能であらう。かかる分類からすると、日本語は確かに島国言語である。つまり極端な言い方をすれば、日本語は、家族同士の言語を社会全体でやっている様な言語なのである。」

重ねて、外山氏の言にそって言えば、「島国言語は冗語性が低い」、すなわち「省略の極度に多」言語ということになる。従って、こういう言語たる日本語（印欧語の中では、ドイツ語などがその典型であるという）と比べると、ある異和感の生ずるのは当然のことである。しかし、この異和感に「非論理性」なる語を当てはめることの不当さについては、既にくり返し述べているところである。

ロ。「島国言語」使用の心理的背景

外山氏の命名による「島国言語」という側面から、日本語を考えると、そこに「非論理性」の錯覚を生む背景があることは、既に述べたが、次にこの「島国言語としての日本語」の心理的背景を考察してみたい。

この面については、多くの人の言があるが、最も注目すべきは、土居健郎氏の言であると思われる。氏は、「日本の社会における種々の営みを貫く一本の糸が甘えである。」⑦（傍線筆者）ことを示した。この「甘え」は、その原型を「乳児の母子分離の事実の心理的否定」⑧に発するとし、更に「甘えの心理は、人間存在の事実につきものの、分離の事実を否定し、分離の痛みを止揚することであると定義できる。」⑨と分析してみせた。

かかる氏の指摘は、先にとり上げた外山氏の言と重ね合わせて考える時、興味深い側面を示していると思う。

ハ。感情語を基層とする言語としての日本語——「音」と「訓」の問題

日本語は、決して非論理的な言語ではないが、そういう錯覚を生むことの一つに、日本語の「音」と「訓」との問題がある。今さら言ひまでもないことであるが、「訓」とは、「漢字を国語にあてて読むこと」⑩であるし、「音」とは、「古来、我国に伝来して国語化した漢字の音」⑪である。（「音」を広義に解釈すれば、中国語以外の外来語をもこの系譜の中に位置づけ得るであろう。）

ところで、この「音」と「訓」とについての使用法について鮮かに分析してませたのは、渡部昇一氏であった。⑫ すなわち、日本人は、心が内へ向い、感情的なもの言いをする場合は「訓」たる「大和言語」を使い、心が外へ向い、知的なもの言いをする場合には、「音」たる「漢語」（もしくは他の「外来語」）を使うというのである。渡部氏は、前者の例としては、「百人一首」や「俳句」「歌謡曲」の具体例をあげ、後者の例としては、「学問的論文」などをあげ、手際よくまとめている。やや、言葉をかえて言うことが許されるならば、次の様に云うことができるであろう。つまり、日本語は、感情的言語を基層とし、これには主として大和言葉を用い、その表層構造たる理知的側面については漢語（外来語）を用いるのである。

勿論、この基層と表層とは、分ち難く連っている訳であるが、我々が日本語を考える時には、直感的に、この基層構造たる「訓」の方へ心が向き易い傾向があるのである。

上述の如く、この「訓」は「感情語」であるから、ここに「日本語非論理性」の錯覚が生ずる余地があるのである。

3. 言語形式としての日本語——日本語の「主語」を中心として

「日本語非論理性」発生の背景として、1節及び2節では、主として歴史的、社会心理的にこれを扱ってきた。しかし、「日本語」も又、言語の一つなのであるから、その考察は、何といても「言語の形式」から、これを論ずる視点が中心にならねばなるまいと思う。

既に、繰り返し述べている如く、言語は、原理的には同質でありながらも、その音韻・形態・文法を異にするのであった。従って、その形態や文法の相違をもって、一方の言語を論理的と呼び、他の言語を非論理的と呼ぶことは、大よそナンセンスである。

ここでは、その一例として「日本語の主語」の問題をとりあげてみたい。

ところで、「主語」という用語を雑作なく述べたが、この問題は、それ程簡単ではない。何故なら、現在のところでは、未だ「主語」の定義も、不明確で、従って、「日本語の主語」という問題は、未だ決着のついていない問題と呼んでよいであろう。⁽¹³⁾

それにも拘らず、「日本語の非論理」を言う際には、必らずと言っていい位、この問題が、とりあげられる。(先に引用した大野氏の発言の中にもあった。)

しかし、主語と日本語の論理性についてのレベルでなら、既に三上章氏の次の如き明解な発言があるのである。

「西洋文法の主語とは、動詞を支配するものにほかならない。それは次のような条件をみたすものである。

□は述語 (finite verb) と呼応し、□以外の成分 (たとえば目的語など) は述語と呼応しない。つまり□だけが述語と呼応する。(中略) この空箱に入れられる成分があるかないかいは、国々の言語習慣次第であって、アプリアリの問題ではない。日本語は、空箱に入れられるような成分がない。これはない方がどうもフェアな(強引ではない)よりである。(アランダ・ライン筆者)」⁽¹⁴⁾

以上は、三上氏の日本語の主語と英語などの主語との相違について触れた箇所である。筆者は、日本語の主語についての三上氏の発言には、全面的には組せぬところもあるが、「言語における主語のあり方は、決してその言語の論理性云々ではない」というレベルは一致するものである。

つまり、三上氏の発言はある言語ともう一つの言語との論理性・非論理云々のナンセンスさを、「主語」のレベルからも、はっきりと証明していると思うのである。

註

- IV ① 大野晋編 『対談 日本語を考える』 P 199
 (中央公論社 S 50-11)
- ② 金田一春彦 『日本語』 P 118
 (岩波書店 S 32-1)
- ③ 大野晋編 前掲書 P 201
- ④ A. トインビー 『歴史の研究』 第1章
 <「トインビー著作集① 『歴史の研究』 P 71 社会思想社 S 42-3>
- ⑤ 志賀直哉 「国語問題」(『改造』 S 21-4月号)
 <岩波版全集⑦ P 339~343 S 49-1>
- ⑥ 外山滋比古 『日本語の論理』 P 70~75
 (中央公論社 S 48-1)
- ⑦ 土居健郎 『甘えの構造』 P 22
 (弘文堂 s 46-2)
- ⑧ 同上 P 82
- ⑨ 同上 P 82
- ⑩ 新村出編 『広辞苑』(第二版) P 664 岩波書店 S 30-5
 S 44-5 ②
- ⑪ 同上 P 944
- ⑫ 渡部昇一 『日本語のこころ』
 (講談社 S 49-10)
- ⑬ 筆者個人としては、現在のところ渡辺実氏の立場に近いところで「日本語の主語」を考えて
 ている。

渡辺氏は、日本語の構文は、あることがらを述べる「叙述」を、文を言い切る「陳述」
 がつつむとしている。その「叙述」をまとめるもの(氏はこれを「統叙」と呼ぶ)は、「
 述語」で「主語」は、この「述語」によってとりまとめられるものの一つというレベルで
 とらえられているのである。(その意味では、時枝誠記氏の「連用修飾語」と近い。但し
 時枝氏においては、叙述・陳述の区別は明確ではない。)

c f 渡辺実 『国語文法論』
 (笠間書院 S 49-7)

- ⑭ 三上章 『日本語の論理』 P 67~68
 (くろしお出版 '63-3)

< その他の主たる参考文献 >

藤岡謙二郎編『地誌概論 日本編』

(大明堂 S 44-6)

安井稔編『新言語学辞典』一改訂増補版

(研究社 S 46-10, S 50-5②)

チョムスキー, 安井稔訳『文法理論の諸相』

(研究社 S 45-1)

坂本百大編『現代哲学選書 4 ことばの哲学』

(学文社 S 47-9)

大野晋『日本語の起源』(岩波書店 S 32-9)

鈴木孝夫『ことばと文化』(岩波書店 '73-5)

鈴木孝夫『ことばと社会』(中央公論社 S 50-4)

ドメニコ・ラガナ『日本語とわたし』

(文芸春秋社 S 50-10)

ドナルド・キーン『碧い眼の太郎冠者』(中央公論社 S 32-10)

「W・A グロータース氏にきく」(『学級経営』明治図書 S 46-2月号)

土居健郎『“甘え” 雑稿』(弘文堂 S 50-11)

「特集 日本語の主語」(『言語』大修館 S 50-3月号)

石橋幸太郎『英文法論』(研究社 '66-5)

森岡健二司会『シンポジウム 日本語②』

(学生社 S 49-12)

大槻文彦『広日本文典』(著者発行 M 30-1)

山田孝雄『日本文法学概論』(宝文館 S 11-5)

橋本進吉『国文法体系論』(岩波書店 S 34-10)

—橋本進吉博士著作集⑦—

橋本進吉『新文典 別記文語篇』(富山房 S 23-8)

橋本進吉『新文典 別記口語篇』(富山房 S 23-7)

時枝誠記『国語学原論』(岩波書店 S 16-12)

時枝誠記『日本文法 口語篇』(岩波書店 '50-9)

阪倉篤義『日本文法の話』(創元社 S 27-5)

三上章『続, 現代語法序説』(くろしお出版 '72-10)

大久保忠利『新 日本文法入門』(三省堂 S 48-12)